

血液型人間分類における受容と持続の解釈について

Interpretation of sustainment and acceptance of
classification of people based on blood type

小山 由

〈abstract〉

The idea that there is a relationship between personality based on ABO blood type and the nature of each individual has been widely accepted in Japan. This understanding has been scientifically referred to as the blood type stereotype. In my previous paper, I argued that there are deficiencies in the definition and its naming. I renamed the “classification of people based on blood type,” and defined it as the idea that classifies all human beings into four groups according to their blood type based on ABO blood typing. ABO blood typing attempts to match the exchange relationships among each ABO blood type with the relationships between each human group using knowledge of blood transfusions. That point needs to be noted first.

For the acceptance and sustainment of this concept that people can be classified based on blood type, a number of scientific interpretations have been added primarily by psychologists. In their interpretations, classification based on blood type has been accepted. Although the idea is scientifically incorrect, people continue to believe the idea because it helps to smooth their relationships or it is deceiving their cognition. However, this interpretation has a fundamental error. The purpose of this paper is to point out the error of the traditional interpretation and to present a

different interpretation.

First, I will show that the traditional classification of people based on blood type is composed of imagery derived from three elements: doctrine, guru and believers. In addition, I describe the assumption that individuals are deceived by the ruses used by scammers who call themselves gurus.

Next, I discuss that expressions such as 'believers,' which are frequently used in the conventional interpretation, generated the illusion that the Observer/interpreter can read an individual's inner mind. I show that the expression of the term 'believers' is a scientific problem.

If it is understood as above, the context of sustainment and acceptance of the classification based on blood type can be perceived as a characteristic idea that people can easily use and is unforgettable, rather than the idea that people are deceived by the pseudo-scientific illogic of classifying individuals based on blood type.

As I have shown in the previous paper, the classification of people based on blood type belongs to an image of the relationships among ABO blood types that can also be applied to people, and the idea of classification based on blood type has no scientific credibility. The conventional interpretation was generated by the stereotype that humans can be easily fooled by pseudo-scientific thinking.

目次

- I はじめに
- II 解釈に使用されるレトリック
- III 「信じている」という表現の問題点
- IV 受容と持続の解釈の捉えなおし
- V 人間の見方についての誤解
- VI おわりに

I はじめに

日本では、血液型人間分類という思考が、100年近くにわたって多くの人々に使用されてきた。とりわけ1970年代以降、この思考は主に心理学者によって批判的に検討が行われ、さまざまなアプローチによって多くの研究が重ねられてきた⁽¹⁾。

それらの研究アプローチの一つに、科学的妥当性に欠ける血液型人間分類が、人々になぜ信じられるのか、信じられ続けるのか、という問いを設定するものがある。その問いに対して、心理学者たちは、その思考を科学的事実であるという錯覚をもたらすために信じられているとか、その思考の使用者に何らかの利益をもたらすために信じられている、という解釈を与えて理解してきた。しかし、これらの解釈には問題があるように思われる。血液型人間分類やその思考の使用者の捉え方に根本的な誤りが確認されるためである。

本稿の目的は、血液型人間分類やその思考の使用者についての従来の解釈方法の不備を示し、その問題を検討し、新たな解釈を提示することである。

Ⅱ 解釈に使用されるレトリック

従来の研究の問題点を示すために、まず研究者における血液型人間分類の解釈がいかなる言説で構成されているかを確認していく。

血液型人間分類の思考やそれを取り巻く人々の状況については、心理学者の大村政男が体系的に説明しているので、そこで使用された表現を用いながら内容を整理してみよう。大村は、戦前期に血液型と気質との関連性を提唱した古川竹二と、戦後に古川の学説を借りて血液型人間学を提唱した能見正比古の学問に対する態度を比較している。そこで大村は、いずれの説も科学的な妥当性に欠ける誤った説だが、「前者が学問的信念を基礎にした誤りであるのに反し、後者は権威や迷信に弱い大衆の性格を巧みに利用した作為的な誤りである」と述べて能見や彼が提唱している説の内容を批判している。大村は、学問的信念を持たない能見のような提唱者は「詐術的行為」で「人心を惑わ」そうとする人物であり、「多くの人びとに非科学的なものを科学的なものとして押し付け、不当な利潤を貪るような人」だと理解している。また大村は、能見が使用する説について「多くの証拠によってトリック性や虚偽性をいかんなく露呈し」たものであり、「それはすでに科学ではなく、宗教的信仰になってしまった〈…〉日本人の民俗的信仰である」と述べ、「血液型信仰」と名付けている。そして、大村は、その信仰を受容する人々を「信者」と呼び「気分にもラがあるが人づきあいが好きで、複雑な思考判断をするよりは権威に頼って生きていこうとするのきな人たち」だと述べている[大村 1998 : 232-239]。

大村ほど明快に述べる例は珍しいにしても、同様の表現は他の研究者にも確認されるものである。心理学者の菊池聡の著作から抜き出してみよう。「血液型をありがたがっている人々」[菊池 1999 : 112]。「この手の詭弁的な論法にあっさり騙されるのは別に血液型信者に限らない」[菊池 1999 : 116]。「薄弱な証拠や可能性のみをたよりに、現在の定説をひっくり返すような大胆な主張を繰り返す、まさにその点で血液型性格判断はオカルトの一領域に

位置づけられる」[菊池 1999 : 117]。「いったいなぜ私たちは虚構である血液型判断をこれほど信じてしまうのだろうか」[菊池 1999 : 118]。「おそらくこうした企業や教育施設では、責任ある立場の人物が、血液型性格判断を盲信しているのだろう」[菊池 1999 : 126]。

このように血液型人間分類を批判的に論じる人々が使用する言説には、特定の表現が確認され、その背後には一連の物語が存在していることが想定される。いま確認してきた大村と菊池の言説から、研究者たちがどのように血液型人間分類とそれに関わる人々を捉えているのかを示そう。

批判者たちの言説には、大村が言及しているように、一般に「宗教」と呼ばれているような比喩の体系が使用されていると指摘できる。具体的には「教義」「教祖」「信者」という三つの要素によって構成されている比喩体系によって説明されていると整理できるものである。すなわち、奇妙な内容の説（教義）、それを提唱する人物（教祖）、教祖の口にする教義を疑いもせず信じ込む人々（信者）、という三つの要素の関係性によって構成される意味体系が、説明の下地として使用されている。また、批判者たちの言説からは、教祖が詐術的な教義を用いて、複雑な思考判断をせずに権威に縋りたい人々を騙すことで信者に変えたということから、批判者たちの言説には「宗教」だけではなく、「詐欺」に関する表現も使用されていることがわかる。つまり、詐術としての教義、詐欺師としての教祖、詐欺被害者としての信者、という意味が重ね合わされている。

1970年代から血液型人間分類が多くの人々に普及してきた。この状況を見た心理学者たちは、その思考の提唱者の主張内容や提示方法の不備を示し、その思考が科学的な正当性や妥当性を持つものではないことを示してきたが、それにも関わらず、その思考の使用者が減少していくことはなかった。これを奇妙に思った心理学者たちは、次に血液型人間分類のもつ論理構成と、人々がその思考を信じるようになった要因を特定するという研究アプローチを採用して研究を行ってきた [cf. 佐藤／渡邊 2011 : 148]。

これらの研究アプローチが指摘するところによれば、科学的に誤った血液型人間分類が多くの人々に信じられる理由は、その思考が人々の認識をごま

かすような論理をもつためである。つまり、客観的事実ではない事象が、この論理によって客観的であるかのように錯覚させられて（認知を歪められて）、人々は信じてきたのだと理解するのである [大村 1998 : 233-235、佐藤／渡邊 2011 : 152-168]。また、錯覚に陥らなくとも血液型人間分類が使用される例もあり、そのことを考慮した上で、その思考が人々に何らかの利益をもたらす「有用性」や「実用性」があるために使用されるのだと理解している。これについては、菊池聡が簡潔に説明しているので以下に引用する。

初対面でよく知らない相手と会って話をしなければならないときなど、こんな便利な話題はない。〈…〉血液型は相手を手軽に判断する上で、非常に手っ取り早い手がかりになる。〈…〉血液型は対人関係の潤滑油になり、互いの関係を促進する機能を持つのだ。〈…〉また、科学的にみえる血液型は、他人の噂話にも非常に便利だ。「あの人感じ悪い」と言うときに、「なにしろ*型だからねえ」と添えると、ただの悪口ではなく、根拠がある客観的な判断に聞こえるから不思議だ。心理学者にさんざん批判されながら、血液型が社会的に重宝されるのは、こうした実用的な利点もあるからだろう。[菊池 1999 : 121-122]

Ⅲ 「信じている」という表現の問題点

前節では、批判者たちが、血液型人間分類やその思考を取り巻く人々のことを解釈するのに「教義（詐術）」「教祖（詐欺師）」「信者（詐欺被害者）」の三つの要素の関係性からなる比喩を使用していることを示した。だが、このような理解のしかたは不適切だというのが私の主張である。本節ではそのことについて検討していく。

佐藤達哉と渡邊芳之も前節の挙げた心理学者たちと同様に、血液型人間分類を「血液型信仰」[佐藤／渡邊 2011 : 152] と呼び、またその使用者を「信奉者」[佐藤／渡邊 2011 : 127] と理解する論者である。彼らはその著作の中で、「そもそもわたしたちが血液型性格判断を信じる深層には、『人の性格

を知りたい』という強い欲求があります」[佐藤／渡邊 2011：148]と述べている。

ここで注目したいのは、佐藤たちが血液型人間分類を信じる人々の心の「深層」に「強い欲求」があると断定しているという点である。ここでは他者の心の内面を把握できることを前提として議論が進められているのだが、その根拠が提示されていないという問題がある。

当然のことながら、観察者は観察対象の心の中を直接に覗きみるということとはできず、推定以上のことを導き出すことはできない。そのため、観察対象の行為の意味・原因・動機を解釈する際には、つねに留保をつけることになる。実例を挙げて示そう。以下の引用は、精神科医の香山リカと物理学者の菊池誠の対談である。

香山 コエンザイム Q10というサプリメントがありますよね。細胞がさびるのを防止するとかいう。どうやればマーケットを拡大するのかということを広報関係者と話をしたことがあるんです。〈…〉広報の人たちも「これを毎日自分たちが飲むようになってから、朝、やけに早く目が覚めるようになったんですよ」などと言っているんです。もう何か「コエンザイム命」じゃないけど、こんなふうに信じて売っているんだと思ってびっくりした。〈…〉それも実は演技で、私と話をするときだけのことで、インチキだっただけならたいへんだからってやっているなら、それはそれであつぱれというか、すごいですけど。多分その人たちは、そうじゃなかったと思うんですよ。

菊池 ある意味偉いですよね、ちゃんと自分で使ってみてやるんなら。でもつくっている人も、そうなんでしょうね。そういう人もけっこういるんでしょう。〈…〉

香山 私たちの医者の世界で言えば、〈…〉インチキを言ってもいいという変な風潮が本当に広がったんですよ。たとえば、医者が開発した化粧品とか〈…〉サプリメントというのを、多分昔は「医事法」上いろいろ規制があつたりして、それを言っではいけないというよ

うなことがあったと思います。〈…〉「こんなことを言ってはいけない」という矜持というんですか、それが全然なくなっていますよ。／だから、それを本当に信じてやっているのか、医者もマーケティング的にこれはいけるぞというようなもので、作為的にやっているのかは、私もよくわからない。そういうことをやっている医者で、心底から本当に信じているという、自己暗示にかかっているみたいになっている人も、私は知っていますけれどもね。〈…〉

菊池 でも、そのお医者さんは本当に信じていたりするじゃないですか。お医者さんとか歯医者さんが、これはまずいんじゃないかと思わせられることを書いてあるホームページをときどき見るけど。本人がそれを信じているとしか思えないというケースがありますよね。

[香山リカ／菊池誠 2008：103-106]

ここで香山と菊池は、効果の信憑性が薄い化粧品やサプリメントを販売する人々の心の中の状態について言及し、「こんなふう信じて売っている(人)」「心底から本当に信じているという、自己暗示にかかっているみたいになっている人」「本当に信じていたりする(人)」と断定的な解釈を行っている。その一方で「実は演技で〈…〉ばれたらたいへんだからってやっているのなら」、「多分その人たちは、そうじゃなかったと思う」、「作為的にやっているのかは、私もよくわからない」、「本人が信じているとしか思えない」というように留保をつけている解釈も確認できる。この対談では、他者の内面を確定する困難さが示されている。

たしかに日常的な会話では「あの人は本気で信じている」「真剣に信じている」「心(の底)から信じている」「熱狂的に信じている」「疑いもせず信じている」「盲信している」「信じきっている」「確信している」「素朴に信じている」「素直に信じている」「演技で信じている(ふりをしている)」というような、他者の心の中をあたかも覗きみたかのような表現が使用されることはよくある。しかし当然のことながら、このような表現は客観的な観点か

らえば誤りとみなされるものである。日常的な会話においては会話内容の科学的あるいは論理的な妥当性がつねに優先されるわけではないので、そのような表現の使用も許容されるべきだろう。しかし、学術的な記述でそのような表現を使用してしまうと対象の解釈が曖昧になってしまったり、論理の齟齬を生じさせてしまうため、その使用には十分な注意が払われる必要がある。

だがすでに見てきたように、従来の血液型人間分類を研究対象としている論文や著作では、他者の心を確定するような表現が概念設定や根拠の提示もなしに使用されることがある。おそらく、それ故に、批判者たちは血液型人間分類の使用者を、教祖の提唱する教義をそのまま鵜呑みにしてしまう信者のような存在として捉えているのだろう。血液型人間分類の使用者们は、「オウム真理教」の信者と同様の位置に置かれ、「マインドコントロール」によって「自発性」や「主体性を失」った「単なるロボット」のような存在として理解されているのである〔佐藤／渡邊 2011：295〕。

批判者たちは「血液型性格判断を真剣に信じる人」〔佐藤／渡邊 2011：134〕というように、あたかも人間の身体の外面に信仰の度合いを示す計器がついているかのように述べるのだが、もしかりにそのようなメーターがあるととしても、いかにその数値を測っているのか、どの目盛りまでいけば「信者」に認定されるのかが、明確に言及されていないという点で問題がある。また、批判者たちは、人間の「信じている」という心的状況を測定する基準が、科学的思考（実証性、検証性、再現可能性、帰納的推論の使用を基礎とする思考）の一つしかないと考えているようだが、そのような前提は疑わしい。このような理由から、従来の研究における解釈には根本的な誤りがあると推測されるのである。

この問題は、前節で示した「教義」「教祖」「信者」という比喩を使用して観察対象を理解していることに起因すると考えられる。とりわけ、その体系の根幹をなしている「信じている」という述語表現が端的にその問題を生じさせていることが読み取れる。その問題点を「信じている」という言葉の使用法から示してみよう⁽²⁾。

「信じる」「信じている」といった人間の「心的状況」や「信念」を表現する言葉の用法は大まかに二つに分類できる。

(1)「私は〇〇を信じる (信じている)」

(2)「あの人は〇〇を信じている」

まず(1)の用例は、「(発話者である)私は、その他の選択肢があることを知ってはいるが、それでも〇〇(特定の考えや人物)を選ぶ(支持する)」という意味の文章である。これは発話者が自身の意図(決意)を、周囲の人々や発話者自身に表明・宣言するために使用されるものである。

一方(2)の用例は、「(発話者の観察・解釈対象である)あの人物は、〇〇について疑わず、その他の選択肢があるということを知ることができないために、〇〇に従っている」という意味の文章であり、発話者が他者の心の中を記述するために使用されるものである。こちらの用法は、血液型人間分類の批判者たちがその使用者たちを解釈する際にたびたび用いるものである。

これらの用法の差異を生み出している要素は「主語の相違」にある⁽³⁾。その違いから述語である「信じている」の意味の違いも生じている。(1)の主語は、発話者自身である「私」であり、こちらでは「私」という主語の意図性が確認できる。一方(2)の主語は、発話者の観察・解釈対象である「あの人」であり、こちらでは「あの人」という主語の意図性(選択の決定可能性)は否定されている。この「主語の相違」と「主語の意図性の有無」を組み合わせて先の二つの用法を分類してみると、以下のように示せる。

(1)「(発話者である)私、意図性・有」

(2)「(発話者の観察・解釈対象である)あの人、意図性・無」

また、この二つの要素の組み合わせのパターンは全部で四通りあり、表にすると以下ようになる。

表 信念の記述についての四つの論理パターン

	私	あの人
意図性・有	A	B
意図性・無	C	D

AとDのパターンについてはすでに述べているので、B、Cのパターンについて説明を加えると、Bは「あの人は意図を持って〇〇を信じている」（「あの人、意図性・有」）、Cは「私は意図を持たずに〇〇を信じている」（「私、意図性・無」）ということを示すものとなる。

ここまで確認すれば、「信じている」という表現を使用することで、通常の用法には存在しないBとCのパターンが見落とされやすいことが理解されるだろう。つまり「信じている」という述語やそれを前提として構成された比喻体系の特性を無自覚なまま使用してしまうことで、「（発話者である）私に非意図的状况があること」と「（発話者である私の解釈対象である）他者に意図的状况があること」が見落とされてしまい、「発話者である私の意図は認めるが、解釈対象である他者には意図を認めない」という立場から議論が進められてしまうと推測されるのである。

従来の血液型人間分類の研究においては、BとCのパターンが想定されていないように思われる。そのために「信者」たちは合理的・意図的・選択的・再帰的な思考を使用できず、誰かに与えられたプログラム通りにしか行動できない「単なるロボット」のような存在として理解されている。だがはたして、このような人間が実際に存在しているのか、実在しない人物や集団について論じているのではないか、ということに立ち返って考えてみる必要がある。

IV 受容と持続の解釈の捉えなおし

前節では、他者の心の内面を勝手に憶測し断定しているという従来の解釈にみられる根本的な問題点を指摘した。そのことから、血液型人間分類の人々による受容とその持続状況（人々が血液型人間分類を信じるようになり、信じ続けている状況）を成立させる要因についての解釈にも誤りがあることが予想される。本節ではその問題について検討していく。

従来の解釈では、血液型人間分類の人々への普及と持続に関して、（1）その思考が科学的なものだと錯覚させられている、（2）その思考が「有用

性」という利点を持っている、という主にこの二つの理由から説明がなされてきた。しかしそれらは、観察者が観察対象の心の中を読み取れることを前提とする議論から主張されたものであり、その解釈に妥当性があるかについて考えなおしてみる必要がある。

まず、他者の内面を直接読み取ることにはできないという立場から考察を行う場合には、一度「信じている」や「信者」といった表現を避けて観察対象を捉える必要がある。ここで問題になることは、これまで記述されてきた血液型人間分類の「信者」と呼ばれてきた人々は、いったいどのような人のことを指しているのかということである。しかしすでに述べてきたように、その存在は、議論の前提とされているために明確に言及されることがない。

管見のかぎり、唯一その点に注意を払っているのが佐藤達哉と渡邊芳之である。彼らは「一般の人たちが血液型と性格とに関係があると思っていることを『血液型性格判断を信じている』と言うのであれば、心理学者は血液型性格判断を信じていない」[佐藤／渡邊 2011：113]と述べている。彼らはここで「血液型と性格とに関係があると思っている」状態を「信者」の認定理由としているが、この説明においても人間の心の中を直接みることができるということが前提とされており、具体的に人々が何を行えば「信者」に認定されるのか、ということ示されていない。依然として内容はわからないままである。

そこで本稿では、血液型人間分類を会話の話題に使用する人を対象として議論を進めていくことにする。私はこれまで「血液型信仰の信者」に該当する人々を「血液型人間分類（という思考）の使用者」というように表記してきたが、この表現は具体的には「血液型人間分類という分類を前提とするゲームの規則に則った上で会話の話題として使用する人々」を想定している。この設定を行う理由は、観察者が直接観察できるのは思考や心の中そのものではなく、発話や記述によって表出した言説であることを明確にするためである。また、他者の心の中を直接みることができるとする前提を避けるためである。

以上のように、観察者が直接観察できる人間の行為に即して捉えること

で、従来の理解の曖昧な点を払拭できるようになる。従来の研究では、血液型人間分類の人々による受容状況について、以下のように表現されることがある。「世の中の多くの人々がそれ〔血液型人間分類〕を信じている」〔佐藤／渡邊 2011：136〕。「社会ではかなり多くの人が『血液型と性格の重大な関係』を信じています」〔佐藤／渡邊 2011：147〕。「血液型性格判断が特別に流行する」〔佐藤／渡邊 2011：150〕。従来の解釈に従って理解するならば、これらの言説は「血液型信仰の信者」たちが多く存在することを意味している。しかし「信者」の意味内容が曖昧である以上、これらの表現も曖昧なものとなり、「信者」の人数の増減について述べられても、どのような状況を意味しているのかわからない。

観察対象を「血液型人間分類という思考のゲームのルールに則った上で会話の話題として使用する人々」と明確にすることで、従来の曖昧な解釈を具体化できるようになる。つまり、血液型人間分類を「世の中（社会）の多くの人が信じている」とか「流行している」状態とは、血液型人間分類の話題を語る人間の人数が多い状況、会話の話題として登場する頻度が多い状況だと理解できるようになる。

この観点は、血液型人間分類における人々の受容とその持続状況は「信者の信仰心」とは関係がないことを示せるという点で重要である。従来の解釈では、血液型人間分類の人々による受容とその持続の理由は、その思考が人を信じさせやすいためだと理解されてきた。しかし先の観点を採用すると、その思考が人々の会話の話題として登場しやすく、人々の記憶に残りやすい（それゆえに観察者の目につきやすい）という、その思考の人々の会話における使用頻度と、論理構成の経年変化に対する安定性・耐久性に要因をみいだせるようになる。

それらに注目した場合、血液型人間分類における人々の受容とその持続を可能としている大きな要因としては、以下のものが挙げられる。

- (1) 万人が参加可能なゲームであること
- (2) チームの所属を自身で決定できず、途中で変更できないゲームであること

(3) チーム間の対立関係によって構成されるゲームであること

ここで血液型人間分類を「ゲーム」と記述するのは、ある規則（ルール）群によって構成された論理であることを示すためである。また、「チーム」は、血液型人間分類の「A型」「O型」といった集団カテゴリーを指している。

まず(1)に関しては、ABO式血液型は誰もが所有しているため、特殊な例外を除いて、血液型人間分類の思考が構成するゲームに誰でも参加できるということを意味している。このことからこのゲームが参加者を獲得しやすい性質を持っていることがわかる。つまり、ゲームに参加する可能性がある人数が多い分、ゲームの話題が語られる機会が増え、そのために人々の記憶にそのゲームの情報が維持されやすくなると推測される。

(2)は、「B型」や「AB型」といった個人の所属するチームが、当該個人ではなく両親の血液型によって多くの場合はランダムに決定されるゲームであること⁽⁴⁾、また個人の所属するチームの変更は原則として不可能であるということを意味している。

仮に各チームの所属員がランダムに決定されるものでなければ、各チームが消滅する可能性が生じてしまう。もし両親が子供の所属チームを確定できると、各チームの所属者の数を意図的に操作できることになり、この操作によって特定のチームが消滅してしまう可能性がある。そうなると、ゲームの体系が変化してしまい、同一のゲームを続行することができなくなってしまう。また、所属員が自らチーム変更できる場合も同様である。そもそも、誰かの意図によって個人の所属チームを操作できしまうと、仮にチームが消滅しなかったとしても、各チームが存在する意義や、その所属員について語る意味がなくなってしまう。

(3)に関して、まず確認しておきたいことは、血液型人間分類は、四つのチームによって構成されるゲームであること、そして、各チームの関係には「相性」と呼ばれる関係性が存在し、A型とB型、O型とAB型は、それぞれ対立した関係とされることが多いゲームということである。

論理構造の安定性という観点からみると、この対立という関係性はもっと

も経年変化に強い安定したものとみなせる。二つの事柄が対立した関係にある（磁石のN極とS極のように正反対に位置づけられている）ということは、それらの特性も正反対であることを意味する。もし各チームがそのように位置づけられていなければ、各チームに関する情報が重複するという事態が生じることになる。そうなると、しだいにチーム間の差異が曖昧になり、やがて一つのチームに統合されてしまうか、反対に情報が重複するチームが無数に発生することになる。このことは、各チームやその所属員について語る意味がなくなってしまうことを意味している⁽⁵⁾。

以上が、血液型人間分類の受容とその持続状況を可能とする要因の詳しい説明である。だが注意してほしいのは、これらは、会話の登場頻度の多さや論理構造の安定性や耐久性の高さの要因を説明したものであり、これらが揃っていればすべてのゲームが血液型人間分類と同じように人々に受容され続けていくわけではないということである。その思考の受容や持続状況には、その論理からなるゲームの規則や論理構造とは関係のない、さまざまな歴史の偶発性ともいえる要因が関わっていると想定されるためである。

たとえば、その受容に関して重大な要因になると想定されるものに、多くの人々に一挙にゲームの規則についての情報が知れ渡ったということが挙げられる。というのも、一人しか知らないような情報は、他者に通じにくいために会話に登場しづらく、話題として取り上げられないうちにその個人もゲームについての情報を忘れてしまう、あるいはその個人が死亡して情報が失われてしまうと考えられるためである。したがって血液型人間分類の受容においては、多くの人々に一斉に（少なくとも局所的にまとまった人数に）その思考の情報が受容される状況があったと推測される。また、その話題が会話に使用してもおかしくない話題だと多くの人々が思い込んだという状況が、初期の受容には関わっていると考えられる。

また、提唱者によって血液型人間分類の思考について記された本がたびたび出版されたり、マス・メディアが注目してその情報を流通させたこと、そして研究者の論文によって批判的に取り上げられてきたことも、この思考の使用の持続に寄与してきたと容易に推測できるし、すでに多くの人々に共有

されている情報であるという事実が、その情報を次世代の人々へ伝達する確率を高めるとも考えられる。

さらには、見知らぬ人と接触する機会が増えたことや、そのような人々との関係を予測しなければならぬ機会が増えたという社会的背景も要因の一つとして想定される。長く付き合っている人物との関係においては、単純化された人間の類型化思考の使用頻度は低くなると考えられる。たとえば、ある個人にとって、家族や幼なじみのような相手とは、長い付き合いの経験を通じて、すでに多くのことを知っている人物である。彼がそれらの人物を評価する際に、「A型（血液の所有者）は真面目だ」といった単純な情報は、いままで得てきた情報と齟齬を生じさせるといった理由から、あるいは単純・抽象的すぎて使いものにならないといった理由から、採用されない可能性が高い。少なくとも、既存の情報群の中の一つとして埋もれてしまい、使用される頻度は低くなると考えられる。

しかし、進学・就職・転勤といった理由によって、彼が住み慣れた土地を離れて新しい土地に住むことになった場合、知り合った当初は、周囲の人々についての情報は皆無である。そのような状況で、彼が周囲の人々と彼の望むような関係を構築したいと考えた場合には、何らかの未来の予測結果をもたらす判断基準が必要になる。このような局面において万人に対応する血液型人間分類のような思考が使用されやすいと推測でき、そのような局面の増加に比例してその思考の使用頻度も増加すると考えられる。

新聞記事などで、血液型人間分類が企業の入社試験や人事配置に使用されているということが奇妙だという論調で取り上げられることがある。それらの記事は、人間関係についての未来の予測が極端な形で要請される立場にいるのが、大企業の人材管理に携わる人々だということを示すものである。彼らは、理想的には、多くの採用希望者の中から、履歴書や試験から得られた少ない情報を用いて、自社に損害を出さずに利益をもたらす人材を選び抜いて採用しなければならず、すでに採用されている人材に対しては、もっとも効率的に利益を引き出せるような部署配置を決定しなければならない、という立場にいる人々だと思われる。しかし、このような長期スパンの未来の確

定的予測はその計算式に含まれる変数が膨大に存在するため実質上は不可能である。それでも選択の決定を迫られた場合には、彼らが、血液型人間分類に類する思考を使用することで（つまり個人や集団の未来を予測する単純な計算式を導入することで）、入社希望者たちや自社の被雇用者たちの個々の特性を一律の特性に還元して評価したり、これから生じるだろう不測の事態に備えるということを行ったとしても少しも不思議ではない。

このように、人々の流動的生活形態の増大や、人材の効率的管理の要請といった社会的背景もまた、血液型人間分類やそれに類する思考の受容（話題として使用される頻度の高さ、使用者の多さ）を支えていると考えられるのである⁽⁶⁾。

いま挙げてきたことは全体の一部に過ぎないが、こういった諸々の偶発的な出来事の積み重ねや交錯によって生じた（生じ続けている）社会的背景が、血液型人間分類の受容と持続の状況に関わる要因になっていることも無視できない。だが管見のかぎりにおいて、心理学者の解釈では、これらの偶発的な出来事の重要性はほとんど指摘されていない。それは、血液型人間分類の持つ論理構造が人々に錯覚を生み出し、それ故に人々はその思考を「信じている」という解釈に重点が置かれてきたためだろう⁽⁷⁾。また、この解釈を正当化させることで、「宗教」や「詐欺」に関する比喩の使用が可能になるということには注目しておいたほうがよいだろう。

批判者たちは血液型人間分類を、教組が信者を獲得するための教義、あるいは詐欺師が被害者を騙すための詐術のような特殊な思考として位置づけようとしてきた（「血液型性格判断が特別に流行する理由」〔佐藤／渡邊 2011：150〕）が、その論理構造は特別に特殊なものであるとは認めがたいものである。また、血液型人間分類だけが他の思考と比べて突出して人々に受容され続けているわけでもない、という点においてもその特殊さは否定できるものである。

じつのところ、星座占いも血液型人間分類とほぼ同等の構造を持っている⁽⁸⁾。また日本での導入・普及時期もほぼ同時期であり、現在までその思考の持続が確認できるという点で、血液型人間分類と同等に扱うことができ

る事例である⁽⁹⁾。このように血液型人間分類と星座占いを同じだと捉えてみると、一般の人々が二つの思考にそれほど大きな違いを感じていない、と考えられるようになる。血液型人間分類は、非科学であるにも関わらず科学の領分を侵食する疑似科学（偽科学、エセ科学）として、他の非科学（オカルト）とされる思考から区別されて論じられてきたのだが、そのような理解が誤りだと考えられるようになる。

たしかに血液型人間分類の提唱者は、自説を科学的なものであると主張することがある。しかしすでに述べてきたように、一般の人々が提唱者の主張にそのまま素直に従っていると断定することはできない。特定の人々が提唱者の説を疑うこともなしに信じ込むという理解は、彼らを「信者」や「詐欺被害者」に擬えた結果として生じたものだと考えられるからである。

批判者たちは、血液型人間分類は疑似科学であり、その思考の使用者たちが誤った情報を科学的真実であると錯覚させられている（その説が当たっているから信じ込む）と解釈してきた。この解釈は、血液型人間分類の使用者は科学的思考を使っているが、その思考を取り扱う能力の程度が低いために騙されているということでもある。だが、この解釈には疑問の余地がある。

たとえば、血液型人間分類を話題として使用する一般の会話の場においては、個人の血液型は口頭で述べられるだけであり、専門家が作成した証明書の提示が要求されることはない。もし血液型人間分類の使用者たちが科学的客観性の探求にいくらかでも関心を寄せているのであれば、仮に科学的思考の訓練を受けていなかったとしても、相手の血液型を確定する作業くらいのことは行うだろう。また人間の探求に関心があるのなら、その他の血液型分類法にも関心を広げるように思われるが、そのようなことも行われてはいない。そもそも、ABO式血液型は血球の表面に存在している二つの糖鎖蛋白（A型糖鎖とB型糖鎖）の有無によって判定されるものであり、これらの糖鎖は血液以外にもすべての体液や臓器にも含まれるもの（そのため、唾液や毛髪といったものからでも血液型は判定できる）[中竹俊彦 2009: 175-176]なのだが、血液型人間分類を使用する人々の多くはそのことを知らず、血液という液体（血球成分、血小板、血漿成分からなる体液）そのものがABO

式血液型を決定する物質であるかのように理解しているようである。

多くの血液型人間分類の使用者が血液型についての客観的事実や科学的知見を積極的に取り入れようとしない理由を、使用者たちの科学的思考の操作能力の低さに求めるべきではないだろう。いま述べたように、血液型人間分類の使用者は、相手の血液型の科学的な真偽を確定すらしようとしないのである。これは、科学的思考操作の能力以前の問題である。このことから、人々が血液型人間分類を使用する動機は、科学的思考に対する態度という観点から捉えるべき問題だということがわかる。

周囲の人々の血液型を確定しようとせず、血液型の科学的情報を取り入れようとしないという態度は、使用者の無関心とみなせるものだが、この態度から血液型人間分類の使用者にとってそれらの情報が重要ではないということが読み取れる。それでは何が使用者の関心事になっているかという点、おそらく、自分と周囲の人々との類似や差異を説明できるような人間を分類する体系が存在すること、また、その分類体系が現在使用しているままの形態でありつづけること、だと思われる。

従来の研究で、人々に錯覚をもたらす理由として挙げられるものの一つに、血液型人間分類の持つフリーサイズ効果（バーナム効果）というものがある。これは「各血液型の所有者の特性（性格）についての表現がフリーサイズで誰にでもあてはまるためにその言説を知った人物は当たったと錯覚してしまうという効果」を意味している。たとえば、能見正比古が挙げているA型血液の所有者の特性には「周囲に気を配る」「相手の反応気にする」というものがある [能見 1973 : 224]。しかし、これらの特性は状況や立場の違いによって誰にでも確認されるものであり、A型血液の所有者だけに限定できるものではない。これらの言説は、具体的な状況が省略された「周囲」や「相手」という表現を使用することによって、意味の範囲や内容を変える（フリーサイズ）効果を生じさせている。批判者たちは血液型人間分類ではこのような言説が採用されるために、使用者たちが「当たっている」と錯覚させられ、信じるようになったと解釈しているのである。

たしかに、血液型人間分類の使用者は「A型は潔癖症だ」とか「B型はだ

らしがない」といったフリーサイズの表現を用いて周囲の人々と会話を行っている。だが、この曖昧な表現の使用の理由が、科学的思考の操作能力の低さではなく、血液型についての客観的事実や科学的知見への無関心さにあるとすれば、血液型人間分類の使用者は錯覚させられているのではなく、そもそも、各血液型の特性といった、分類によってもたらされる「内容」を重要視していない（「A型は潔癖症だ」といった言説が当たっていなくてもかまわない）ということになる。先に確認した、相手の血液型の科学的証明を厳密に要求しないという無関心の態度も、このことを裏付ける。これらのことから、血液型人間分類の使用者が重要視している関心事は、その思考がもたらす「内容」そのものではなく、「内容」があることを保証する分類体系（分類の「形態・器」）が存在していることだと推測できるようになる。

また、血液型についての客観的事実や科学的知見を積極的に取り入れようとしないう態度から、その分類の形態が極力変化せずに現在の形のままでありつづける、ということも使用者の関心事だと解釈できる。

これらの解釈は、使用者の心理の内面に踏み込んだ解釈であるため推測の域を出ないが、血液型に対する客観的事実や科学的知見に無関心だという使用者の態度が、少なくともそれらの事柄に寄与するものであることは理解されるだろう。

いま述べてきた、科学的思考に対する無関心の態度は、科学的思考とは異なる水準の思考様式が存在することを示唆するものである。次節では、この思考の存在を証明し、それがどのような思考であるのかを説明していく。

V 人間の見方についての誤解

従来の血液型人間分類の研究には、そもそも人間一般の理解に根本的な誤解があるように思われる。本節では、これまで述べてきたことをふまえてその誤解を指摘しながら、血液型人間分類がいかなる思考であるのかを述べていく。

従来の研究にみられる人間一般についての誤解とは、「人間の思考領域に

は科学的思考しか存在しない」と考えられているということである。すでに見てきたように、血液型人間分類の批判者たちの理解では、血液型人間分類を使用する人々は「信者」と呼ばれ、「教祖」や彼の提唱する「教義」に騙されて信じ込まされていると理解されてきた。この理解は、人間の思考様式が科学的思考の一つしか存在しない、あるいは他の思考が存在したとしても科学的思考の下位に位置づけられる未発達なものだと考えられている、といかえることができる。いずれにせよ、評価の基準は、科学的思考（実証性、再現可能性、帰納的推論の使用を基礎とする、等の条件を備えた思考）しか存在しないという考えを前提としている。だがこのような理解は誤りだと思われる。科学的思考とは異なる水準で使用される他の思考様式の存在が確認されるからである。

その実例を挙げると、たとえば、日本語を母語とする人々は「犬猿の仲」「河童の川流れ」といったことわざを使用することがある。使用しない人もいるが、少なくともその意味を理解することはできる。だがそもそも、それらのことわざを話したり、その意味を理解するほとんどの人が、犬と猿が対峙している場面に遭遇したことがあるとは思えないし、河童においても同様である。それにも関わらず、これらのことわざを周囲の人々に話してもおかしいという評価を受けることはない。

これらのことわざは比喩的な思考様式、すなわち、ある事物の特性や関係を別の素材に置き換えて説明するという思考によって構成されたものである。いま挙げた例が示すとおり、比喩的思考では、みたことがないものや実在しないであろうものを使用できる。この思考は帰納的推論から結論を導き出すというものではなく、「仲が悪い人々の関係」を「仲が悪いとされている猿と犬の関係」に重ね合わせたり、「泳ぎが得意な人」を「泳ぎが得意だとされている河童」に擬えたりすることで成立する思考様式である。したがって、もし非実在的な存在について語る人がいたとしても、その使用者を科学的な思考が使えない人だとか、使うのが下手な人だとすぐに断定することはできない。

前稿において私は、血液型人間分類が「ABO式血液型の輸血関係をその

所有者の関係性に対応させる」ことで成立する思考であり、比喩を行う際に使用される思考だという仮説を提示した。つまり「A型血液とB型血液の輸血関係のように、それらの所有者が接近・接触すると互いに怪我をしたり、場合によっては死んでしまう（相性が悪い）」とか「すべての血液に供血できるO型血液のように、所有者であるO型の所有者も気前がよい（おおらかだ、大雑把だ、誰とでも仲良くできる人々だ）」といった科学的思考とは異なる操作によって作られる思考だと述べた〔小山 2014：19-25〕。もしこの仮説が妥当性を持つのであれば、従来の研究者たちの血液型人間分類に対する解釈は、「河童の川流れ」ということわざを会話に持ち出す人々を「実在しない河童が存在していると錯覚させられている」とか「役に立つために河童の存在を認めているふりをしている」と解釈するのと同じことになる。

従来の研究では、科学的思考以外の基準は存在しないと考えられてきたために、比喩的思考である血液型人間分類は、疑似科学（科学のふりをする非科学）というカテゴリーに入れられてきた。比喩的思考は、科学的思考とは異なる論理操作を用いる思考であるために、「科学—非科学（疑似科学）」といった科学的思考の基準を採用すると、非科学（オカルト）の側に入れられてしまう思考なのである。しかし先に示したように、比喩的思考は、二つの素材を重ね合わせて理解する（類似を強調する）ものである。科学的思考とは異なるやり方で論理を組み上げるが、そこには明確な規則がある。その意味において、比喩的思考は科学的思考と同等の論理性を持っているとみなせる。

科学的思考と非科学と呼ばれる思考の関係は、あたかも個人の頭脳という限られた領土の内部で、勢力争いを繰り広げる敵同士のように理解されることが多い。この二つの思考の関係性が、陣取り遊びやイス取りゲームのように理解されてしまうのは、「非科学」というカテゴリーを用いて思考の分類が行われているためだろう。このカテゴリーは、科学的思考の基準から外れる思考すべてを含むものであり、その思考の持つ内容は「科学的か否か」という点しか考慮されることがない。たしかに、その中には科学的思考の萌芽が認められるものもあるだろうが、おそらく、その大半は比喩的思考として

取り扱えるものだろう。

すでに確認してきたように、比喩的思考とは、科学的思考とは異なる基準から論理を構成するものであり、科学的思考と領分を奪い合うような性質を持ったものではない。もし仮にそうだとしたら、優れた科学者は比喩的思考が使えないことになるし、反対に優れた詩人が科学的思考を使用することができないことになるが、実際にはそんなことはない。このことから、二つの思考は人間の頭脳の中でそれぞれ固有の位置を持ち、互いの領域を侵食しないものだと考えられるのである。

もちろん、比喩的思考は血液型人間分類の批判者たちも使用している思考である。たとえば「胸が張り裂けそうだ」「頭が割れそうだ」「心が折れる」「腑に落ちる」「気が滅入る」「馬が合う」「腹の虫が収まらない」といった比喩は日本語を母語とする人なら誰しもが使用（理解）する表現である。これらの表現を使用するたびに「本当に胸が張り裂けそうなどと思っているのか?」「心が折れるわけがないだろう」「気存在を信じているのか? それとも演技で信じているふりをしているのだろうか?」などとは、異なる言語体系（比喩体系）だけを身につけた人物以外は誰も思わないし、それらを使用しているからといって科学的思考が使えない人と認定されることもない。

また、批判者が使用している血液型人間分類により近い比喩の例を挙げるならば、先に述べた「教組（詐欺師）」「信者（詐欺被害者）」（じつは「教組に騙されない人」というカテゴリーも隠れて存在している）というチーム群によって構成される比喩は、さまざまな人間の関係を別の説明体系に置き換えて表現するという点で血液型人間分類と類似した比喩だといえる。

「本気で（本当に）信じている」とか「演技で信じているふりをしている」といった表現は、人間の心の中を解釈する基準が一つしか存在せず、その基準に照らした程度や深度によって人間を測定することができるということを前提とするものだが、比喩的思考はこのような表現では捉えがたいものである。もし仮にこのような表現を採用するとすれば、同様の比喩を使用する解釈者も「科学的根拠がないにも関わらず、血液型人間分類の話題を持ち出す人を血液型信仰の信者だと断定していいと本気で信じている『信者認定信

仰』の『教祖』・『信者』』だと批判者に認定されてしまうことになるだろう。もちろんこのような解釈は不当なものだが、同様に「血液型人間分類の信者」についての解釈も不当であることが理解されるだろう。つまるところ、巧拙の差こそあれ、誰しものが科学的思考と比喩的思考のいずれの思考も使用できるものであり、それらを使用する場面や状況が人によって異なっているということなのである。

以上の説明で、血液型人間分類の使用者によって語られる「A型」「B型」「O型」「AB型」を体現する人物が実際に存在しないのと同様に、その思考の批判者たちに「信者」と呼ばれてきた人物もまた架空の存在であることが理解されただろう。また、科学的思考を用いて物事を考える際には、「信者」という架空の存在を自明の前提としてしまう「信じている」という述語や、その述語を基礎に置いて成立する比喩体系は、十分に注意を払った上で使用する必要がある、ということも理解されたことと思う。

従来の研究で、これらのことが見落とされて議論が進められてきた理由は、おそらく、血液型人間分類の批判者たちが、自身の使用する思考を絶対的なものとみなし、そのことを自明の前提にして対象の解釈を行ってきたためだろう。そのため、観察・解釈対象である人々と観察・解釈者である自身を同じ俎上にのせること、つまり自身と観察・解釈対象の使用する思考が比較されてこなかったのである。もし自身を解釈対象である人々と同じ立場に置くことができたなら、所属する集団において解釈者もその内部でのみ通用するような用語を使ってさまざまな事柄について語っていること（とりわけ、専門家ギルド内においてはそれが顕著だろう）、その集団に属さない人々の目からはその会話が奇妙なものに映っていることに気づけたはずである。そして、自身も何らかのステレオタイプによって認知を歪められていること、自身も解釈対象と同等の比喩的思考を使用していること、血液型人間分類がそれほど特殊な思考ではないことが理解できたはずである。

解釈者である自身と解釈対象は、これまで論じられてきたほどには大きな差異を持ってはいないことは明らかである。解釈者は、その事実を誤認しているという理由から、実在しない架空の存在である「信者」を作り上げたり、

「良い／悪い」「善／悪」といった倫理的な判断基準を持ち出すことで、自身の解釈と事実のあいだにある論理的不整合の飛躍を行っているように思われる⁽¹⁰⁾。そのような不整合をもたらす論理操作は、より誤解を助長させたり、議論の進展を阻害してしまうため、早急に解決されるべきだろう。

Ⅵ おわりに

本稿では、従来の血液型人間分類の批判に確認されるその思考の使用者の対象化の仕方の不備を指摘し、そこから派生する人々がそれを受容する理由の解釈や、人間一般にともなう解釈の問題を挙げ、それらの検討を行うことで、血液型人間分類がいかなる思考であるのかを確認してきた。

血液型人間分類の思考やその思考を取り巻く状況に対して、これまで重要な研究価値をみいだされてきたとはいいがたい。人間の思考や行為を対象とする宗教学、社会学、文化人類学、民俗学といった学問分野からはほとんど注目されず、唯一、心理学の分野だけがそれを取り上げてきた。しかし、心理学においても、その思考は簡易な比喩によって理解され、多くの問題が生じるような解釈がなされてきた。

血液型人間分類の思考やそれが生じさせてきた（生じさせ続けている）社会状況は、とりわけ日本の人文社会科学系学問の研究者にとって、重要な研究価値を有する事例であるように思われる。それは研究者の家族、親族、友人、恋人、同級生、同僚、隣人といった「身近な人々」に観察される事例だという理由に依拠している。たとえば、国外のような遠い場所に住む人々が奇妙なふるまいを行っていたとしても、日本や日本語を「ホーム」とする観察者にとっては大きな問題とはならないだろう。その事例は無数にある「アウェイ」のうちの一つでしかなく、観察者の日常生活とはほとんど無縁のものであるため、「彼ら（彼女ら）の文化や歴史が我々のものとは違う」という解釈によって処理される可能性が高い事例だと考えられるからである。しかし、ほかならぬ観察者自身のホームに住む人々に奇妙なふるまいが観察された場合には、「文化や歴史が違うから」という解釈を簡単には採用するこ

とができない。彼ら（彼女）らは、言語、通貨、法制度、基礎教育、生活様式、日常生活で得る種々の情報、といった観点から解釈者と類似の度合いが高いと想定される人々だからである。

とはいえ、血液型人間分類の事例においては、観察対象の奇妙な思考やふるまいの原因を「個人の科学的思考能力の欠如、短期スパンにおける実用性への希求（娯楽への誘惑の抵抗力のなさ）」や「個別の文化や歴史の違い」といった要素にみいだそうとする研究者の態度が確認される。この態度は、解釈対象を心理的に遠ざけることで解釈者から切り離し、劣った同類や別種の生物として取り扱おうとするものだといえる。だが、解釈対象を自らと異なる存在だとみなして切り離してしまうと、以降にその分断状況を解消する機会はずまず訪れない。すでにみてきたように、解釈対象を解釈者から切り離れた状態が議論の前提とされてしまい、初期の状態と比べてその妥当性を疑う機会が極端に減ってしまうからである。したがって、他者の解釈に取りかかる際には、解釈対象がいかに奇妙なふるまいを行っているようにみえたとしても、解釈者と同様の思考を持っており、その操作能力も同等であると設定した上で解釈に取り組む必要がある。

観察者にとって身近な場所や人々に観察される事例は、それを詳細に吟味することで、従来の他者についての解釈をみなおす機会になる。つまりその事例は、奇妙さが生じさせている原因が、観察対象ではなく、観察者自身にあるのではないかと疑わせてくれるものになる。その疑いを経てはじめて、観察者は自身の使用している思考や基準を対象化し、観察対象の人々のそれを等価に扱うことができるようになる。そして、両者の思考・基準に通底する普遍的・客観的な論理パターンに接近できるようになるはずである。

佐藤と渡邊は「血液型と性格に関係がないのなら、われわれが日常生活で血液型と性格の実感することもないはずだし、ましてやその関係をこれほど多くの人が信じているという現実はとても奇妙なものです」[佐藤／渡邊 2011:148]と述べているが、このような観察者が感じる「奇妙さ」は、異文化との接触において生じる相対的なものである。

この奇妙さをただ追いかけただけでは、目先の奇妙さに「心を奪われて」

しまい、根拠のない解釈を加えたり、無用な細分化をしてしまうことで、問題をより複雑にするという結果をもたらすことになるだろう。普遍レベルの視点を獲得してはじめて客観的に各々の文化の固有性や特殊性を位置づけられるようになるのだから、まずはさまざまな場所で確認される奇妙な事例から共通パターンをみだし、そこから普遍的な人間の思考を抽出し、各事例に還元できるように分析に使用する概念の整理を行う必要があるのではないだろうか。

血液型人間分類のような身近な事例の誤解を放置したままで、より空間的・心理的に外部に位置づけられる人々を十全に理解できるようになるとは思われぬ。身近な事例と同様の誤解によって躓いてしまうと予想されるからである。

血液型人間分類という身近な事例を詳細に検討していくことが、人間が操作する思考や人間が作り出している社会を研究対象とする日本の研究者に、従来の誤解を気づかせ、普遍レベルの視点を設定するための手がかりをもたらすことになる、と私は信じている。

注

- (1) 血液型人間分類とは、「血液型占い」「血液型性格判断」「血液型性格関連説」「血液型ステレオタイプ」と呼ばれ、「ある人の ABO 式血液型とその人の性格に関連があるという考え方」〔佐藤／渡邊 1991：159〕と定義される思考である。私は前稿で、それを「輸血学の知識を利用することで、あらゆる人間を各々が所有する ABO 式血液型によって四つの集団（人種）に振り分け、ABO 式血液型間の交換関係を各集団間の関係性に対応させる思考」と再定義し、「血液型人間分類」と再命名する必要があると主張した〔小山 2014：24〕。したがって、本稿でもこの名称と定義を使用して論じていく。なお、本稿は前稿を補足する内容となっており、血液型人間分類を研究として取り扱う際の注意点を浮き彫りにし、より実態に即した方法を導き出すという目的によって書かれたものである。
- (2) 「他者の信念」を記述する際につきまとう解釈の問題を「信じる（信じている）」という言葉の使用法から捉えなおすという画期的なアイデアは、文化人類学者の浜本満から借りたものである〔浜本 2003、2006〕。
- (3) ここでは、発話する解釈者である「私」とその人物の解釈対象である「信者」と呼ばれる人々の乖離状況を端的に示すという目的のために議論を単純化して行っている。より詳し

く論じると、「主語の相違」は厳密には一人称、二人称、三人称の三つに分類できる。二人称と三人称は、ともに「他者」と記述されるが、大きな違いがある。二人称の場合では、たとえば、発話者が「おまえは○○を信じている」と発言した時、その文章の主語である人物は目の前にいるため、「ああ、信じているよ」「いいや、違う。勝手に決めつけるなよ」「たしかに信じているが、その理由はよくわからない。なんでなんだろう?」「もしかして、ケンカ売っているのか?」といったように、反論や弁解を行う機会が存在している。だが三人称を使用する場合は、その言説の主語に該当する人物が発話者の目の前にいないため、反論や弁解の機会が存在しない。そのために発話者は、自身の主張を反論もなく主張し続けることができる。おそらく二人称の場合は、発話者は相手との対話の応答を通じて相手の意図性の存在を確認することになるだろう（そもそも、普通は目の前の相手にむかってそんな失礼なことをいわないのだが）。このことから、二人称は一人称のパターンと同等の位置におけることがわかり、同時に三人称の用法のみが相手に意図を認めない（認める機会がない）という点で、特殊な位置づけに置けることもわかる。またこのことから、発話における意図性の有無の確認には、「主語」に置かれる人物の応答可能性が重要な役割をはたしていることも理解できるようになる。

- (4) ABO式血液型の遺伝子型は全部で六種類（OO、AA、AO、BB、BO、AB）ある。この組み合わせは全部で21パターンあり、その中で子供の血液型が確定する（ランダム要素が伴わない）両親の血液型の組み合わせは「O型とO型（OO型とOO型）」「AA型とAA型」「BB型とBB型」の三パターンである。
- (5) 分類の論理「形態」の維持といった観点からみれば、「A型（血液の所有者）は真面目」「B型（血液の所有者）はいいかげん」といったチームやその所属員たちの特性といった「内容」は、論理形態の維持に関係がないことがわかる。論理形態の維持にとって重要な点は、各チームそれぞれに固有の位置づけが与えられており、それ故に各チームの特性（内容）がその他のチームと重複しないということである。チーム間の関係が固定化されていけば、内容が入れ代わっても論理の形態に影響を与えない。そして、その固定化を可能としているのが対立関係なのである。血液型人間分類では、A型とB型、O型とAB型という対立関係の二つの軸によって支えられている。血液型人間分類の全チームの配置関係が図示される際には、二本の軸棒を交差させて作られた四角形（菱形）が描かれることが多いのだが、このことは各チームがそれぞれ「東西南北」のような固有の位置が与えられていることを示している。そのような論理形態が存在することによって、知り合った相手が「A型の人」だと分かれば「B型の人と正反対の性質を持っている人物」だとか「B型の人とは相性が悪いが、それに比べるとO型とAB型の人とは合う（相性が良い）人だ」ということを一挙に知ることができるようになる。このことは、血液型人間分類が人々の話題に挙がりやすいことと、記憶に残りやすいことを説明可能にする一つの要因である。

(6) ここで述べていることは推論の域をでないが、その推論は発生期において血液型人間分類の思考が学校教諭であった古川竹二によって考案され〔溝口 1986、1990〕、軍隊や活用された〔溝口 1987〕という情報に基づいている。また、戦後の普及期における提唱者の一人である鈴木芳正は、「所属している産業心理研究所で会社の採用試験や個人の進路指導、カウンセリングなどにたずさわったかわら」に自身の提唱する「鈴木 BN 法」の創出の決意をしたと述べており〔鈴木 1986：234〕、普及期に人材コンサルタント業者と血液型人間分類のあいだに関わりがあったこともわかる。したがって、血液型人間分類のような人間を分類する思考は、学校、軍隊、企業といった大きな組織（人材の管理者にとって縁もなく、まったく知らない人物が集まってくる場）に集合した人々を適材適所に配置することで効率的な人材管理を行おうとするという目的に合致したものであることが推測できるようになる。

(7) ただし佐藤と渡邊は歴史の偶発性について注意を払っている数少ない研究者である。彼らは「流行」の一つの原因として、日本社会における「血」の観念を挙げている。彼らによれば、日本や東洋において「血」は「日本や東洋の思想の中で親からの遺伝や、生まれつきの性質を象徴する言葉」であり「その型と人柄、性格に関係がありそうだと考えるのはある意味自然」だと述べている〔佐藤／渡邊 2011：150〕。また彼らは日本における血液型分布に注目し、「A 型（…）四割、O 型が三割、B 型が二割、AB 型が一割というずいぶん偏った」「絶妙な比率になっていること」〔佐藤／渡邊 2011：160-161〕、そして「みんなが自分の血液型を知っていること」〔佐藤／渡邊 2011：149〕が、日本で血液型人間分類が流行する理由の一つとなっていると述べている。

さらに彼らは血液型人間分類の論理形態についても注目しており、「血液型性格判断は人の性格をごく単純に四つのタイプに分けてくれます。これが二つでは物足りないでしょうし、逆に一二個あったりしたら複雑すぎてわかりにくくなります。血液型性格判断の流行には、ABO 血液型が四種類という絶妙な数であることが強く影響していますし、Rh 型（二種類）や HLA 型（八種類）、HPA 型（一三種類）などの血液型による性格判断が一向にあらわれないのも同じ理由でしょう」〔佐藤／渡邊 2011：149-150〕と述べている。

だが、結局、彼らは「血液型性格判断には科学的根拠はなく、それが当たるように思えるのは錯覚です」〔佐藤／渡邊 2011：168〕と述べて、血液型人間分類の「流行」の原因をその思考が人々を騙す論理であるという点に還元し、先に挙げた要因の可能性を放棄している。

(8) 星占いのゲームの規則に従えば、万人はその出生時の天体の位置関係（一般的には誕生日）によって、「牡羊座」「牡牛座」といった特定の集団カテゴリーに振り分けられる。ゲームのチームの数（集団カテゴリーの数）は全部で12あるが、それらのチームは、それぞれの星座が持つ火、地、風、水の四つの元素によって分類でき〔cf. クロフォード／サリヴァ

ン 2005 : 30]、四チームで構成されるゲームであるともいえる。このように、このゲームの規則は、万人が参加可能なゲームである点、所属チームの決定に人間の意図が介入しづらい点、所属チームを途中で変更できない点、ゲームにおけるチームの数が同数であるという点から、血液型人間分類というゲームにきわめて類似する思考だといえる。

- (9) 平凡社の雑誌編集者だった赤木洋一は、1970年にフランスの雑誌エルから占星術のコナーのアイデアを借りて、日本ではじめての占星術を特集する雑誌を作ったという。赤木は「それまでも日本の女性誌に『占い』のページはありましたが、星占いはなかった」[赤木 2007 : 11] と述べている。血液型人間分類の発生時期は厳密に言えば、戦前期まで遡れるものであり、戦争を境にして一度、受容が途切れた思考だとされている。それがふたたび人々の注目を浴びようになるのは、放送作家の能見正比古が『血液型でわかる相性』を出版した1971年以降である [cf. 佐藤／渡邊 2011 : 109-112]。
- (10) 血液型人間分類を批判や否定するという行為は、その思考の使用者に少数者への差別を生じさせる、あるいは、使用者の人生の可能性を限定してしまう（行動の制限を加えてしまう）という理由 [佐藤／渡邊 2011 : 159-168] から正当化がはかられている。これはいかなれば、「人間は幸福を追求しなければならない」や「人間の思考や行動はなにものにも制限を受けてはならない」といった倫理的な判断基準から主張されたものである。たしかにそれらはもっともな主張だが、人間が社会を構成していることで生じる不可避の制約（たとえば、人間は人間を分類しなければ対象化できないといったこと）を考慮しなければ、空論のままに終わってしまうだろう。そして、重大な問題点は、これらの主張が、解釈の不備や不整合を「血液型信仰」や「信者」たちに押し付けることで成立している点にあるように思われる。血液型人間分類における差別の問題については、稿を改めて論じた。

参考文献

- 赤木洋一 2007 『「アンアン」1970』平凡社新書
大村政男 1998 『血液型と性格』新訂版、福村出版
香山リカ／菊池誠 2008 『信じぬ者は救われる』かもがわ出版
菊池 聡 1999 『超常現象の心理学——人はなぜオカルトにひかれるのか』平凡社新書
クロフォード、サッフイ／サリヴァン、ジェラルディン 2005 『誕生日大全』（アイディ訳）、主婦の友社
小山 由 2014 「トーテミズムとしての血液型人間分類」『常民文化』37 : 1-30
佐藤達哉（サトウタツヤ）／渡邊芳之 1991 「血液型性格関連説と人々の性格観」『人文学報』223 : 159-174

- 2011『あなたはなぜ変わらないのか——性格は「モード」で変わる 心理学のかしこ
い使い方』ちくま文庫
- 鈴木芳正 1986『のびのびB型』新装改訂版、産心社
- 中竹俊彦 2009『「流れる臓器」血液の科学——血球たちの姿と働き』講談社ブルーバックス
- 能見正比古 1973『血液型人間学——あなたを幸せにする性格分析』産経新聞社出版局
- 浜本 満 2003『他者の信念』[http://members.jcom.home.ne.jp/mi-hamamoto/research/
fragmentary/belief.html](http://members.jcom.home.ne.jp/mi-hamamoto/research/fragmentary/belief.html) (2014年11月23日閲覧)
- 2006「他者の信念を記述すること——人類学における一つの擬似問題とその解消試案」
『九州大学大学院教育学研究所紀要』9：53-70
- 溝口 元 1986「古川竹二と血液型気質相関説——学説の登場とその社会的受容を中心として」『生
物科学』38（1）：9-19
- 1987「軍隊と血液型気質相関説」『生物学史研究』49：19-28
- 1990「智能・学業成績と血液型気質相関説」『生物学史研究』52：33-42